



未来新聞

岡山空襲

一九四五年(昭和二〇年)六月二十九日午前二時四三分から午前四時七分にかけて行われた岡山大空襲。

六月二十八日午後七時十五分、午後八時五十分にかけてテニア島を飛び立、た29はそのころ世界最大の爆撃機B-29は、そのころ世界最大の焼夷弾を積んで岡山の空に現れた。この空襲により少なくとも三七七名を超える死者が出たとされている。岡山空襲では、二つの焼夷弾が投下された。

その一つが焼夷弾M4。この焼夷弾M4は高音で燃えるゼリー状などが約十八kg詰められていた。もう一つの焼夷弾は焼夷弾M7でゼリー状のガリリンともう毒の黄リンなどが約三kg詰められていた。

このことにより私はこれから、一日一日感謝して生活しようと思えた。そして、小さなけんかやもとなが、戦争になつてしまふから、平和な国を守っていくことを多くの人に広めたい。

編集者

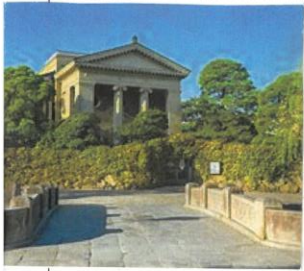
岡山市立蛸明小学校

空襲と大原美術館の

絵画疎開

岡山空襲の被害は倉敷市にも来ていて、岡山県倉敷市にある大原美術館に展示されているおよそ三〇〇〇点もの貴重な作品が空襲により全焼されることになった。

大原美術館初代館長の武内初太郎は、三三三の点の絵画を被害を受けるおそれ、低い農村部に作品を疎開させることを決断した。その絵画を疎開したのは足守地区の今、日近にある三宅さんの家だ。当時五才だった三宅彰子さんは、夫と二人で暮らしている。おおよそ三十三点もの作品を大切に守り、抜かないといけなくなり、上で「ユルグ」モノ、見島虎次郎など世界で活躍している人が書いた絵を戦争している中、保管しないといけないという「ヤウ」があった。もし良か岡山空襲が起きていたころに生まれていて、絵画を守り、ほしうとたのまれたら、アレッ、ヤウ、きんちゃんうたかないかと思う。そんな中、絵画を守り、三宅さんのことを尊敬する。



伊賀さんの兄の手文庫

明楽さんの実体験

岡山空襲を実際に体験された明楽さんに聞いたこと、伊賀節子さんのお兄さんが残した手文庫の意味とは、岡山空襲中はほとんど食事ができず、(南京かぼち)、いりこ(二人一匹)、砂糖みそと言った物を少しずつしか食べるしかできていなかった。その話を聞いて、今の私たち、日本では考えられない話だなと思った。それに、毎晩、毎晩空襲警報が発令されて、「ねてる」場合ではないし、わからない状況だ。でも、明楽さんは当時五才。まだ小さいのに、食べる物が少なくて、生活していかけるのはとてもすごいことだ。と思うし、私は当時の明楽さんより、大いけ、短時間の大雨や、少ししゅれた。ど、たけでも師を感ずるのに、五才で空襲にたえたのはとてもすごいことだ。と思う。

当時五才だった明楽さん、他の人も、一日一日生きていくのが大変で、次の日のことなんか考えられず、日々奮闘の生活をしていったと思う。

三田さんが教えてくださった、伊賀節子さんのお兄さんが戦争に行くまでに残した手文庫。

その手文庫の中には、軍に行くまでの伊賀節子さんのお兄さんの日記帳、手紙などが入っている。その手紙には、「元気でやれよ、筆者だよ」などの言葉が書いてあった。私は、その言葉の意味を、戦争に行ったら、こゝに帰ってこれるか、かわからないから、その手紙を書いたんだと思う。

伊賀節子さんのお兄さんが残した日記帳は、伊賀節子さんのお兄さんで、過ぎた日々を七ねないでほしい、たお兄さんの気持ちがあるんだと思う。明楽さんは、五才で体験したくないような思いが出がせられたくても、せられない、嫌、悪い思いが出。伊賀節子さんのお兄さんも、軍に行きたくて行、たわけては、その場でも、せくな、た、絶対に行きたくないと、田。伊賀節子さんのお兄さんと明楽さんが共通していることは、その場でも、せくな、た、絶対に行きたくない、悲しい思いが出、せ、残るといふことだ。と思う。

まとめ・編集後記

岡山空襲が起きたころは、今では考えられない暮らし、生活をしていて、一日一日生きるのが大変で、次の日のことなんか考えている場合ではない。今では安心して暮らしている時間が多ければ、戦争時は安心して暮らしている時間が少なかった。と思う。

今では将来の夢を聞かれるけど、当時は、戦争で亡くなるかもしれないし、そんなことを考えられない。私たちが目指す未来は、平和で、食料も自然も十分な未来を目指していきたい。

